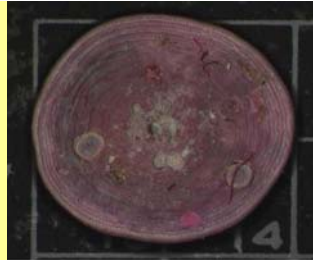


鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 平成23年度調査報告「鹿児島県三島村竹島総合調査」

国際島嶼教育研究センターでは平成17年より水産学部南星丸の協力を得て南西諸島の島々の総合調査を行っています。
平成23年度は5月9日-12日に鹿児島県三島村竹島において総合調査を行いました。

竹島沿岸から産出した有孔虫 *Amphisorus hemprichii* 八田明夫・新田光平（教育学部）

現生有孔虫を研究することで、化石有孔虫の産出する地層の堆積した時代や環境を解析するとともに、理科の教材として役立つことができる。筆者らは、2011年5月に竹島沿岸でサンプルを採取し、有孔虫の研究を行った。八田・新田が竹島港の西海岸のタイドプールで有孔虫を含む堆積物及び小石や岩に付着した有孔虫を採取した。竹島港等の沿岸で寺田がダイビング調査を行い有孔虫のサンプルを採取した。海岸や沿岸で採取したサンプルには多くの有孔虫が含まれていた。肉眼で確認できる保存の良い平らな円盤状の形の大型有孔虫、所謂「銭石」と思われる大型有孔虫も多産した。海岸のタイドプールでは肉眼で確認して指で拾い上げて採取することができた。和名の「銭石」は、*Marginopora vertebralis* Quoy & Gaimardに限られる。竹島から産出した有孔虫について、Hohenegger (2011), Yordanova and Hohenegger (2002), Hatta and Ujiie (1992)やLoeblich and Tappan (1994)などを引用して鑑定を行った。その結果、竹島で採取された所謂「銭石」と思われた標本は、*Amphisorus hemprichii* Ehrenbergであった。(写真の有孔虫の直径は4mm)



竹島の沿岸から産出した
Amphisorus hemprichii Ehrenberg

竹島の伝統歌謡の現状 梁川英俊（法文学部）

竹島では伝統歌謡関係の取材を行なった。入港した5月9日は、夕刻から漁船の水揚げ式で、島民がフェリー待合所前に集って会食。隣に座った男性から島の伝統芸能である八朔踊りの情報。「八朔踊りは何年もやっていない。唄を歌えるのが一人だけで、鉦を叩くのが難しい。鉦と太鼓を用意して録音してみたが、声が小さくて聞き取れない。伝承が危うい」。翌10日は竹島小中学校を訪れ、平松教頭に話を伺う。学校の廊下にはジャンベが並ぶ。翌日は硫黄島ジャンベスクール校長の徳田健一郎氏が教えに来る予定とのこと。夏季休暇中にはジャンベ合宿もあるという。その後、八朔踊りの歌い手の中原新吉氏、婦人会長の日高喜世子氏を訪ねて話を聞く。両氏の話を総合すると、八朔踊りは消防団が踊っていたが、鉦の叩き方が難しく伝承者がいないらしい。保存会を作るといふ話があったが立ち消えになったとのこと。馬方踊りは現在も踊られているが、唄は15、6年前に録ったカセット。盆踊りの歌い手も2、3人になっているという。八朔踊りについては、できれば復活したいので協力してほしいと出港前にビデオを2本渡されたが残念ながら傷みがひどく再生不可能であった。



竹島小中学校の教室にあった
「八朔踊り」の写真

三島村竹島の海藻相 寺田竜太（水産学部）

竹島の海藻植生を明らかにすることを目的として潜水調査を実施した。竹島は後背地が崖と丘陵で構成されており、竹島港内の東側や東風泊、南部の籠で海藻類が多く見られた。竹島港内の海底は砂礫であり、海藻類はほとんど見られなかったが、護岸や捨て石上にカギケノリやミル類、カイメンソウなどが見られた。竹島港外は変化に富んだ岩礁が形成されており、カギケノリやナガミル、フクロミル、ヤブレグサなどが多く見られた。調査の結果、緑藻16種、褐藻8種、紅藻39種の計63種が確認された。このうち、環境省のレッドリスト(2007年改訂版)の掲載種として、ハナヤナギ(紅藻綱イグス目、絶滅危惧Ⅱ類(VU))、ハイコナハダ(紅藻綱ウミゾウメン目、準絶滅危惧種(NT))、イトゲノマユハキ(緑藻綱イワズタ目、NT)の3種の生育が確認された。



調査風景

三島村における人口移動と竹島の出郷者の会について

田島康弘（国際島嶼研協力研究員）

筆者はこれまで社会地理学的な立場から、出郷者の会＝同郷集団、の存在に関心を持ち、現代社会の中におけるその持つ意味について検討してきた。そこで、今回は三島村における出郷者の会について調査、把握することを行った。一般に、出郷者の会は都市部とくに大都市部に形成されることが多く、また、出身地域からの相当数の人口移動を前提としている。三島村の人口動向は1960年代の大幅な減少、1970年代の停滞、1980年代以降の漸減として捉えられるが、これを集落別にみると、竹島と片泊は全体とほぼ同様の傾向を示し、硫黄島は硫黄鉾山の閉山に伴う1960年代の急激な減少を特徴とするのに対し、大里は人口減少傾向がかなり緩やかである。すなわち、2010年の1950年に対する人口減少率をみると、他の3集落が70～80%であるのに対し、大里は49.2%とかなり異なっている。他方、鹿児島市における出郷者の会の形成状況を見ると硫黄島会、片泊会、竹島会は存在し、活動したことが知られているが、大里出身者の会は存在しなかったようである。これは人口動向の特色を反映した結果ではないかと推測している。



竹島の風景

小さな島の産業・文化と未来可能性

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

島の未来可能性不安は産業基盤・次世代誕生と育成・文化社会基盤の継承にある。牧畜はTPP次第では存立根拠を失い、畜産は生食需要があり季節限定で新冷凍技術導入に対し費用に耐え得る規模にはない。水産では出荷規模・週3便・市場への近接性に課題がある。光明は新船導入次世代と3島連携力にある。交流は自治会・学校連携での相互島訪問交歓・ジャンベ学童演奏で定常化しつつある。便も枕崎便が試行されている。新技術は黒島のスマートグリッド導入などで馴染みにもなりつつある。未就学年齢児童男2女3名、小中学生13名(しおかぜ留学6名)という数は、必ずしも限界集落的状況ではない。教師の子供数も割り引くと、しおかぜ留学がない島の未来は不安感の源泉である。子どもへの授業での伝統文化活動はなく若手への文化継承も課題を抱えていた。八朔踊り仮面など保存箇所確認。馬方踊りも聖大名神社で230年近く継承されている。同神社の一對唐猫は文化財的価値があり、廃仏毀釈を免れた美麗釈迦像も別箇所の保存を確認した。また水神・山神・地神も大切にされており、初山初磯や平家伝承芸能・行事も存続している。しかし体系的保存記録化措置なしでは早晚保持困難になる。口永良部小中学校廊下資料室同等の、自然・遺物・史料・生活産業道具類・文化芸能記録の島を挙げての島内保存を求めたい。



保存された八朔踊り仮面の一部

竹島に生息する巻貝の殻色多様性

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）

キバアマガイは屋久島以南の岩礁域に生息し、その貝殻は白色、縞模様などの多様な表現型を持つ巻貝で、貝の多様性維持機構の解明には最適な貝類である。今回の調査では北限と報告されている屋久島より若干北に位置する三島村竹島の港近くと島西部の岩礁域におけるキバアマガイの生息状況とその貝殻色の多様性について調査を行った。その結果、竹島においてキバアマガイの生息は確認されたが、全観察個体数は3個体と非常に少なかった。また、貝殻の色多様性については白色の貝殻と縞模様の貝殻が観察された。遺伝的多様性があまり高くないと考えられる北限個体群において多様な殻色が観察されたことは、殻色多様性に与える要因として温度、捕食圧などの環境要因の重要性が一層高い可能性が考えられる。



竹島の潮間帯